

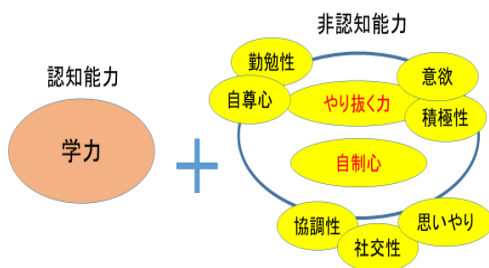
教育現場における非認知能力向上事業：トリプルP導入の可能性 2017.4~2020.3

氏名 鈴木 裕美^{1,3}、神田 かなえ^{2,3}、宮武 伸行¹

所属 ¹香川大学医学部衛生学、²香川大学医学部公衆衛生学、³NPO法人親の育ちサポートかがわ

はじめに

非認知能力（NCS）とは、人間が生きていくために大切な能力で自己実現の原動力となり、人を成功に導くものである。NCSは年齢と共に上昇し、中学生で精神的健康度が悪化するのと呼応してNCSも低下する。親子関係の良い子どもは、精神的健康度が良好かつNCSも高い傾向にある。



NCSに関する先行研究では、NCSが高いと子どもの学習意欲が増し、成績がよくなる、学校・家庭共により生活態度を身に着ける、社会でも正規職につき所得が高い、心身ともに健康度が高い、10代の妊娠や犯罪率、失業率が低い傾向にあることが分かっている。

NCSを伸ばすには愛着というしっかりとした土台を築き、そこから生まれるNCSの芽に家庭や学校で前向きな言葉かけを十分与えながら、子どもが集団生活で様々な人と関わり、多くのことを学習し、失敗や困難を乗り越えるプロセスの中で育っていく。

欧米では1960年代よりNCS研究が行われているが、日本では数年前から注目されるようになった段階である。香川大学では2年前より県教委と共に日本で初めてNCSを学校全体で取り組む教育介入をすることになった。

事業内容

今回、トリプルPがNCS向上事業でどのように扱われ、NCSを向上させることができるのか、その可能性について紹介する。

対象は毎年香川県の幼稚園2園、小学校2校である。介入内容は以下の3つである。

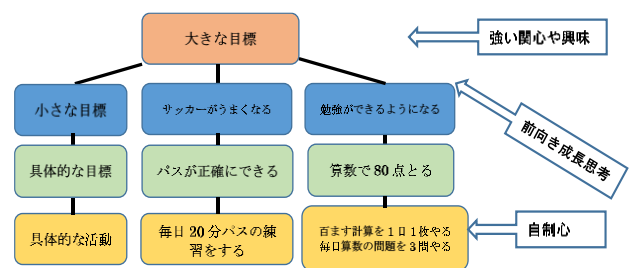
1. 家庭通信（16通～24通/年）愛着の築き方、子育て五原則、ルールの作り方、やり抜く力の育て方、子どもとの話し方、前向きな考え方を教える等

2. 講演2回/年（愛着の築き方、やり抜く力の育て方）
 3. 幼稚園・小学校での教師による取り組み
- 評価方法：アンケートによる前後比較

【NCSを育てるトリプルPの教え】

1. 愛着の築き：グループトリプルPのセッション2
2. NCSの育ちを考える時、「やり抜くためのピラミッド」から、3つの項目が必要になることがわかる。まずは、（1）大きな目標を持つために「強い関心や興味」が必要であり、これは五原則の②積極的に学べる環境作りから育てることができる。次に（2）長期間続けるために「前向き成長思考（チャレンジは楽しい、失敗は成長の糧、結果ではなく経過が大事であるという考え）」が必要で、具体的には①安心感を与える「失敗しても大丈夫」、②経過に注目する「頑張ってるね」、③未来に注目する「次はどうすればいいと思う？」という声掛けが重要である。これらは子育て五原則の①安全・安心して過ごせる環境作り、④現実的な期待感をもつに相当する。最後に、（3）小さな目標を達成するために行う日々の活動には「自制心」が必要である。五原則の「一貫したわかりやすいしつけ」を行うことで育むことができる。

このように、トリプルPは「NCSを伸ばすことができる」という切り口からもアプローチでき、現在求められる教育目標に合致していると考えられる。



成果と課題

集団に対する介入研究では、グループトリプルPで行うような個に合わせたきめ細やかな対応はできないため、期待される結果を短期的に出すのが難しい。集団介入の限界でもあるが、広く周知することができ、トリプルPを用いた新たな試みとして意義があると考えられる。

